●里山農園の 10 号地にかぶさっていたクヌギを伐採

京都府のレッドデーターブックの地形・地質・自然生態系編でコナラの群生として指名されているのが多々羅地域です。この地域の小山にはいたるところでコナラなどが繁茂していて、木炭の生産地として利用されていたことが分かります。近年木炭や薪の使用から化石燃料への依存に移り変わり、山林利用が激変してしまいました。中山間地の若者は勤労者となって出て行き、村落に赤ちゃんの泣き声が聞えなくなりました。それから 50 年たって未利用の薪炭木が放棄され、写真のように太く大きく高く成長してしまいました。薪炭木に最適なのは直径 14 ㎝の太さの生木を運搬するにも、炭窯に詰め込み作業も取り扱いやすく、約 14 年物が歓迎されてきました。しかしそのように管理されなくなって、とんでもない大きさになってしまいました。老木になって樹液が出なくなって昆虫たちも困っているのではないでしょうか。これまで観察を続けてきたオオムラサキの成虫や幼虫の確認調査では 2 年間続けて見つけることが出来なくなってしまいました。この山の危機を察知して植樹に取り組んできましたが、まだまだ時間がかかるようです。今回 10 号地の巨大木を伐採して安全に農作業ができるようになればと思います。

1 月 20 日の里山農園の作業日に太田、寺村、播川、金田、大村さんの 5 人が未明から続いていた雨の中、勇気を出してクヌギを伐採していただきました。心配していた雨は作業が本格化して大木の切り出しとなってきたころには、小降りになり止み始めてくれたので面倒な作業もスムーズにすすみました。枝の片付けも進み、重たい芯柱の持ち出しが残りました。これは天気が悪いので足場が乾いたころに持ち出し、炭窯小屋へ運搬したいと思います。いつもの顔ぶれの 5 人の皆さんの息が上手く合って無事に大木を切り倒すことが出来ました。大仕事ご苦労様でした。

●京田辺市文化協会創立 60 周年記念祝賀会が開かれる
1 月 20 日　リーガロイヤルホテル京都　50 人が出席

祝辞を述べる京田辺市教育委員会

開会挨拶で「文化によるまちづくり」が強調されました。そして市民の文化活動の活発化・史蹟・発信・文化遺産の紹介・発信（田辺音頭の具体化）を通じて精神的生活の質の向上が進み、町への愛着の高まりが図られるだろうと文化協会の進むべき方向が語られました。そして文化のプラットホームとしての役割を果たしてゆけるように頑張ると開会挨拶がありました。里山の会からは常務理事の山村が出席してイタセンパラの取組、ヤマトサンショウウオの発見と保全活動、木津川の希少植物の維持活動などを紹介しました。京田辺市文化協会は教育委員部局から京田辺市の市長部局に担当が変更になって戸惑いが色々あるようです。

●メダカの提供実施と里山農園のミツバチについての打合せを開催

里山農園に日本ミツバチの巣を設置させていただきたいとの申し入れをされた安岡俊爾さんは、持ち地所の畑の池でメダカが誕生しているので飼育してみたいとお考えの皆さんにおすそ分けをしたいとの申し入れで、具体的に実施のための打合わせを１月 25 日（木）15:00 から里山の会事務所で開催することに決まりました。里山の会員で日本ミツバチによる養蜂されているのが安岡俊爾さんと山岡治作さんで、西洋ミツバチで養蜂をされている吉村國男さんの三人がおられます。メダカを受け取りに来られた折に殆ど詳しく知られていない蜂についてもぜひ理解する機会をのことで、この春に取り組んでみようと一致しました。魚の専門家の福井波恵さんも共感されて良い取り組みにしたいと開催に乗り気です。ご期待ください。

●京都を襲う積乱雲「5 兄弟」という記事が昨年 9 月に京都新聞に掲載されました。

紹介記事が乙訓の自然の機関誌で頂きましたので皆さんにお伝えいたします。

夕立が降るのは　夏空にひときわ目立つ存在の入道雲は夕立をもたらす雲で、気象学では「積乱雲」。こもが積み重なった形で天気が荒れる原因になる雲という意味が由来になります。周りが山に囲まれた日差しが厳しい盆地でよく現れます。京都盆地は、この条件に当てはまり、入道雲のメッカとも言える地域です。古くから入道雲がやってくる方向の山々や地域にちなんで様々な名前が付けられています。以下、2021 年 7 月 11 日の毎度ニュース/京都新聞記事を紹介しますとありましたので・・・兵庫丹波生まれの丹波太郎　奈良北部生まれの山城次郎　入道雲は、真夏の日差しと上空の寒気によって生まれます。強い日差しで地面近くの空気が暖められ、上昇気流が発生し、この時上空に寒気があると、「軽い暖気」と「重たい冷気」が激しく対流を起こし、積乱雲の卵ができます。複雑の地形の方が対流は起こりやすいため、「丹波太郎」の故郷は兵庫県北部の山地、「山城次郎」は奈良県北部の山地辺りとなります。なぜそれぞれ京都市をめがけて来るのか。京都の積乱雲を長年調べている気象予報士で、元桃山高校教諭の村山保氏によると「上空の風幹が行き先を左右している。夏の太平洋高気圧が西日本に強く張り出すと京都府の上空 5000m 付近は西～北西の風になる。「丹波太郎」はこの風に乗り、発達しながら福知山市や南丹市などを経て京都市に向かい、標高が低い亀岡盆地で一時衰えるが、愛宕山（924m）を超えるときに再上昇して勢いを取り戻す。一方『山城次郎』と「比叡三郎」は、夏の高気圧が張り出し、かつ東シナ海付近に低気圧がある時にやってくる。この時、上空 5000m 付近は南～南東の風が吹き、奈良県北部や滋賀県南部で発生した積乱雲が流れてくる。近年、この３兄弟に弟２人が誕生している」と説明されています。四男の「桃山四郎」は、村山氏が顧問を務めた桃山高校グローバルサイエンス部の生徒たちが存在を確認しました。「丹波方面から来た積乱雲の卵が、京都市街の都市熱によって徐々に発達し、伏見区桃山付近で積乱雲となり雨を降らせ始めると。また、大阪から淀川沿いに京都へ向かう「田辺五郎」という五男も気象関係者の間で認識され、大阪市や近郊の年熱で発達しているとみられます。（乙訓の自然：96 号から）

中聖牛現地見学会

日時：2 月 3 日　10 時～12 時半

開催場所：玉水橋東詰め広場

***現地説明　竹門康弘　自然環境保全京都府ネットワーク代表**

「伝統河川工法について～竹蛇籠・中聖牛の役割と効果」

※前号に申込方法等、詳細記載

木津川の生き物の棲み処づくり　参加者募集！

2023 年 10 月に府立植物園で製作した竹蛇籠を 2024 年 2 月 17 日に木津川に設置する予定です。木津川では、中聖牛の設置を始めてから 6 年目を迎えました。2 月 3 日に開催する現地見学会では、この間の中聖牛の形状変化や中聖牛によって新たに形成された生き物の棲み処を現場で見ていただきます。